

軸 鳥意花情

画題

鳥意花情(ちよういかじよう)

賛文

鳥意花情 各冠奇。窓衆禽者豊水翁而

作 石及海棠者 瘦石先生也 春日雅兄添蘭与

蕉 妾亦福長花 以全此図。于時明治二十二年

憲法発布後七日也 小桃河甲子併識



香花情各尉奇
德石先生也畫曰雅也深
王時於化二十二年
寫法若布後七
一茶子蕉言亦福長花
一全此圖
一按江中子漢成

次の軸の説明文は鷹見耕様から頂いた文書です。

○製作の動機

この絵には、街道・牡丹・春蘭が描かれ、文人画の画題の一つである「玉堂富隆」を含蓄する。玉堂とは、玉手石・白頭鳥・蝙蝠・鶴亀など長寿を意味する事物が多いこと、小桃が「明治二十二年憲法発布後七日也」と記載していること、四人（種田豊水、山陰瘦石、別役春田、河田小桃）が協力して描いた大作であることから、個人的なお祝いのためではなく、憲法発布に寄せ、国の弥栄を祈って作成したのではないかと考えるものである。

○絵の解釈

鷺鳥は二羽いるが、二羽とも少し奇妙な形に描かれている。上の鷺鳥は首が細く、右足も不自然である。また下の鷺鳥は首が短く、目の位置も不自然である。鷺鳥を描いた豊水翁は五十八歳で土佐古代塗の祖である。画材として鷺鳥を選んでおり、下手であるはずはない。そこで、この奇妙な形に描かれた理由を考えてみた。二羽の鷺鳥は、くちばしと足の形から鷺鳥と知られるが、首が細く体が白いため、一見ただけでは白鳥かとも思ってしまう。この勘違いしそうな点にこそ、重要な手がかりがあった。二羽の鷺鳥をよくよく眺めていると、上の鷺鳥は鶴に、下の鷺鳥は亀の形に見えてくる。上の鷺鳥の首は鶴の首に足は亀の頭に似せて描かれており、また、下の鷺鳥の首は、ウミガメ科のタイマイの足ように見える。また背に描かれた×印は、亀の甲羅を意識してのことと考えられる。芭蕉の葉を蝙蝠に描いたように、ここでは鷺鳥が鶴亀の形に描かれている。鶴は千年、亀は万年という長寿の象徴である。二羽の鷺鳥を鶴亀の形に描くことで、ここにも長寿の願いが込められている。

それにつけても、この絵の発案は一体誰であったのだろうか。画家かそれとも画家以外の第三者か。豊水翁と瘦石先生は五十年代、春田雅兄は三十代、小桃は二十代。世代の異なる四人が合作したこと自体、稀有なことといわねばならない。既に画家として名が知れ渡っていたとはいえ、春田雅兄と小桃にとっては大変なプレッシャーの中で描いたにちがいない。

聽濤堂雅集 *額

聽濤堂雅集 山陰瘦石天靜

戲圖

陰刻 .. 春星草堂 陽刻 .. □堂□□□



* 上の絵の登場人物誰か分かりますか。安岡又彦、房、秀彦、別役春田、種田豊水、山陰瘦石、河田小桃、河田小龍、・・熱燗の道具などが次の鷹見 耕様の説明で「● 聴涛堂雅集」の項に書かれています。

最終頁に絵の舞台、似た装置を紹介しています。

次の額の説明文は 鷹見耕 様から頂いた文書です。

聴涛堂の風雅な集いにおいて、山陰生まれの瘦石が、故郷から離れた場所で心静かに遊ぶ図（瘦石が文字を書いたということでの理解）

◇ 聴涛堂 多くの人が集まる建物を堂という。安岡又彦氏が座敷を聴涛堂と名づけ、文人のたまり場とした。

◇ 雅集 雅集は雅会と同じ。風流な集まりのこと。

◇ 山陰 出雲国松江出身の瘦石が、生国地を山陰と記したと考えられる。

◇ 天静 文字が小さく「天」と読んでよいか判断に迷った。とりあえず「天」と読んで解釈する。天涯静処という意味に取り「てんじょう」と読み、「故郷から離れた場所で心静かに」と解釈した。

「天静かに」と読み、「空が静か」「空が穏やか」「空がすっきりと澄み」と理解する方が素直かも知れないが、「高知県人名事典」に『郷里において排斥されることろあり、明治十年代に郷里を去って伊予に遊び、明治二十（1887）年高知県に来た。』とある記述や、山陰、天静という言葉が敢えて記載されていることから、「故郷から離れた場所で心静かに」と解釈する方が瘦石の心に似つかわしいと考えた。

明治十年以降、瘦石は居住地を転々としている。この聴涛堂に遊んだ日々は、おそらく高知県香美郡赤岡村に居住していた時のことではないかと推測する。

○聴涛堂雅集の作者について 種田豊水と考えられる。

※判読できなかった落款印に手がかりがないかと期待する。

※瘦石は南画家であるのに、絵は純日本画風のため瘦石とは考えにくい。

※又彦氏に対座する形で描かれており、瘦石自身が描いたとするには無理があるように思う。（単独で描かれているなら問題としない）

※「山陰瘦石天静戯圖」の文字と陰刻の「春星草堂」（下の落款は読めないため記述しない。）は、作者が瘦石に題名と印を押してもらおうよう依頼したものと考えた。

※種田豊水としたのは、絵が純日本画風であることと、画中の人物の目の描き方が、鳥意花情の絵の鳥の目に似ているように感じたため。

※瘦石に文字を依頼した理由 題字の下に落款を押すのが普通であるから、「春星草堂」の印を持つ瘦石が書いたと考えられる。瘦石に文字を依頼したのは、雅集に参加した瘦石を記念してのことと考えられる。絵そのものは雅集の全体を描いたもので、特定の人物を描いたものではない。右端に瘦石がいるのも、瘦石を意識しての絵とは考えられない。

● 「天静」の語句について

「天静」の二字の意味に迷う。

一天静謐（いつてんせいひつ）、天空安静（てんくうあんじょう）、天涯静処（てんがいじょうしよ）などの言葉を連想する。

当初、一番心引かれた言葉は、一天静謐である。一天は空一面、空全体。静謐は静かで落ち着いていること、また世の中が穏やかに治まっていることの意味である。「天静」を嵐が静まりと理解したり、自然に心静か又は心おだやかにとも理解したりした。

● 瘦石の人生を髣髴とさせる詩について

元の詩人、馬致遠(ばちえん)の元曲(げんきょく)、天浄沙(てんじょうしゃ)・秋思(しゅうし)には、瘦石の人生を髣髴とさせるものがある。「天浄沙」は曲牌名(きよくひめい)詞の長短の句や押韻等の形式)で、「秋思」は詞題(しだい)である。「天浄沙」は「天静沙」とも記載される。

天浄沙・秋思

作者:馬致遠

枯藤老樹昏鴉，小橋流水人家，古道西風瘦馬。夕陽西下，斷腸人在天涯。

天浄沙(てんじょうしゃ)・秋思(しゅうし)

枯藤(ことう)の老樹(ろうじゆ) 昏(くれ)の鴉(からす)，

小橋(しょうきょう)の流水(りゅうすい) 人家(じんか)，

古道(こどう)の西風(せいふう) 瘦馬(そうば)。

夕陽(せきよう)西(にし)に下(くだ)れば，

斷腸(だんちよう)の人(ひと) 天涯(てんがい)に在(あ)り。

◇枯藤 葉が落ち枯れたような藤蔓をいう。

◇流水 せせらぎ

◇古道 古くからある古びた道

◇斷腸人 辛い思いをしている人。

◇天涯 空の果て。極めて遠いところ。故郷を遠く離れたところ。

第一句は重苦しいもの、第二句は小さいもの、第三句は衰勢を表す。

第四句で人生の黄昏を暗示し、第五句で流浪の境遇を嘆く。

この詩には、たそがれゆく秋の風景の中に、天涯に漂泊する旅人の、何ともしやなく塞ぎこんだ気持ちを表現している。

※ 繰り返し譬えることで、譬えがたい気持ち表現される。

※ この詩を念頭に置き、手振りして明るく安岡又彦氏と語る瘦石(*額の右で対話している人の右側)の絵を見ると、言い知れぬ感動が沸いてくる。山陰と天静の言葉がなければ、このような解釈はしなかっただろうと思うと、さらに感動がこみ上げてくる。

※ 天涯の語句は、別役春田氏の詩にも出ている。

● 聴涛堂雅集の作者について

種田豊水と考えられる。

※判読できなかった落款印に手がかりがないかと期待する。

※瘦石は南画家であるのに、絵は純日本画風のため瘦石とは考えにくい。

※又彦氏に対座する形で描かれており、瘦石自身が描いたとするには無理があるように思う。(単独で描かれているなら問題としない)

※「山陰瘦石天静戯圖」の文字と陰刻の「春星草堂」(下の落款は読めなため記述しない)は、作者が瘦石に題名と印を押してもらおうよう依頼したものと考えた。

※種田豊水としたのは、絵が純日本画風であることと、画中の人物の目の描き方が、鳥意花情の絵の鳥の目に似ているように感じたため。

※瘦石に文字を依頼した理由
題字の下に落款を押すのが普通であるから、「春星草堂」の印を持つ瘦石が書いたと考えられる。瘦石に文字を依頼したのは、雅集に参加した瘦石を記念してのことと考えられる。絵そのものは雅集の全体を描いたもので、特定の人物を描いたものではない。右端に瘦石がいるのも、瘦石を意識しての絵とは考えられない。

※瘦石が山陰と記載した理由

雅集の参加者が瘦石の素性、出生地を良く知らないことから書き添えたと考えられる。

なお、「天静」の持つ意味については、瘦石が高知にきた時期、理由がわかると、真に迫ることができないのではないかとと思う。

● 聴涛堂雅集

◇ 一番右の人物について。

天野瘦石と思われる。南画家。瘦石は生来多病で長身瘦軀(ちようしんそうく)、領下(がんか…あごの下)に白髭(しらひげ)を蓄(たくわ)え、飄々(ひようひよう)たる生活ぶりであったという。画中に白髭の人物は一人しかいないから天野瘦石と推測した。絵が描かれた年は分からないが、瘦石が土佐に来たのは明治28年(1895)歳のときのことである。明治二十三年には吾川郡弘岡村に移り住む。生来多病で長身瘦軀というから身体的意味合いも含めて瘦石と名乗ったのであろう。格子柄を着ており、又彦氏と思われる人物に手振りを交え歓談している。

◇ 瘦石と話している人物について

安岡又彦氏と思われる。又彦氏が膝に載せているのは、一弦琴と思われる。幕末の志士達は、一弦琴の稽古ということで、倒幕の密会をカモフラージュしたという。又彦氏は、一弦琴を膝に載せ、前屈みの姿勢で真剣に瘦石の話しに聞き入っている。

又彦氏はなぜ一弦琴を膝に載せているのだろうか。私は、おもてなしをしようと一弦琴を用意したが、つい瘦石の話に聞き入ってしまった又彦氏の姿がここに描かれているように思う。

◇ 瘦石の手前の人物について

被布(ひふ)を着ているのは別役春田氏と思われる。被布は外出用にも室内着としても用いられる。外出用に着てきたが、やや寒くもありそのまま着ていたと考えられる。瘦石と話している人物と風貌が似ている。手前に丸盆が置かれ、蓋付き湯のみと菓子らしきものが添えてあることから客と判断され、兄の春田氏と推測した。左裾が少し掛かっている帙(ちつ)付き和綴本は、漢詩の本と思う。又彦氏の近くにいることから、又彦氏と話したが、又彦氏が瘦石と話をしているので、仕方なく庭を見ているのではないかと思うところである。

左手に細長のぐい飲みを持ち、子供と向き合っている。子供から「一杯いかがですか」と声をかけられ、「うーん」と体を右に向けたその瞬間が描かれているように面白い。

繰り返すが、春田氏の体の方向は、当初不自然に思われた。春田氏と同じ座り方をすれば分かることだが、おそらく開け放たれた障子の先の庭を見ているためだと思われる。

◇ 絵を描いている女性について

河田小桃と思われる。髪形は未婚者の髪形である桃割れ（ももわれ）ではないかと思う。（小桃が結婚していたがどうかは分からない。万一、桃割れでなくとも、初々しくかかっていることに間違いはない。）

敷布の上に半切（はんせつ）らしき画仙紙を置き、菊らしき絵が描かれている。この絵の作者は小桃が描いている花を当然知っているから、菊らしき絵は、菊を描いていると理解しても良いのではと思う。何も見ずに描いていることに驚く。

平台には、硯、洗皿、水入れ、筆壺が置かれている。また、白紙の画仙紙が二枚ある。

◇ 子供について

子供は縦縞（たてじま）の着物に、袖無し半纏（はんてん）を着ている。左手にお銚子を一本持つて春田氏と向きあっている。

◇ 左の女性について

又彦氏の妻「房」と思われる。房は文久元年（1861年）生まれで、慶応二年（1866年）生まれの又彦とは、五歳上の姉さん女房になる。髪形は丸髷（まるまげ）で、江戸時代から明治時代を通じて最も代表的な既婚女性の髪形である。左手で襟を押さえる仕草が可愛らしく描かれている。

木製の平台に置かれているのは酒燗器（しゅかんき）と水注（すいちゆう）である。酒燗器は酒を温める道具で、銅製と思われる。上に2つ穴があいている。手前の穴に水を注ぎお湯を沸かし、お銚子を入れて熱燗にする。奥の穴は、熱燗にする前、又は熱燗にした後のお銚子を置いているようだ。図では見えないが、熱燗にする穴の下には、側面に火のついた炭を入れる口がつけられている。

水注は、瓢形（ひょうけい）をしている。白磁（はくじ）又は青磁（せいじ）の瓢形水注（ひょうけいすいちゆう）と思われる。細長い注口（そそぎぐち）、取っ手、共蓋（ともぶた）がしっかり描かれている。酒燗器の水差しとして使われているようだ。

◇ あごに手をあてている人

あごに手をあて、小桃の絵を見ている人は頭が禿げており高齢と考えられる。袈裟を着けていないため僧侶ではない。小龍の風貌とも異なる。私は、種田豊水ではないかと推測する。この絵が描かれたのは、瘦石が赤岡、高知にいた明治二十年から明治二十二年の時期で、種田豊水は、六十二歳から六十四歳。

◇ 酒を注いでいる女性について

酒を注いでいる女性の髪型は銀杏返しという髪型と思われる。銀杏返しは既婚者がする髪形である。年配である。房の母親かお手伝いかは不明。帯は文庫結びと思われる。文庫結びは、結ぶ帯や場を選ばず比較的手軽に結ぶことができる結び方である。

◇ 囲碁を打つ二人について

右の人は黒髪のため若く、左の人は白髪で高齢である。囲碁に向かって対局している姿が描かれている。明治時代の囲碁は対局時間無制限であるから、おそらく一局で雅集の時間が終わってしまうのではないかと思う。時間のかかる娯楽であるから、二人が画家であるとは考えにくい。将棋ではなく囲碁を打っていることから士族と思われる。

◇ ぐい飲みはすべて左手・左側に描かれている。

酒飲みのことを「左きき」という。右手に銚子、左手に杯というのが酒飲みのスタイルである。子供はこのことを知らないのだろう。左手でお銚子を持っている。

◇ 正面右側の床の間には、台付香炉が置かれ長い線香が立っている。左側には懸崖台(けんがけだい)があり、縦長の花瓶に活け花が飾られている。活け花は左右のバランスがとれるよう活けられている。掛軸は、奇山と舟が描かれた中国風の山水画である。現在掛けられている掛軸と同じものかどうかは不明。

◇ 正面左側の床の間にあるのは、舟型花籠のようである。

◇ インテリアとして季節の野菜・果物が盛り付けられている。(土佐の風習?)。果物は大きく、土佐文旦(とさぶんた)のように見える。後ろには掛軸が掛けられている。

◇ 雅集の時期 全員が厚着していることから夏ではなく、暖房具で暖を取る様子も無いため冬でもない。

春か秋のいずれかであるが、小桃が菊を描いているように見え、籠盛りに土佐文旦があるように見えることから、秋と考えられる。天静という言葉からも、秋を感じる。

火鉢は台付きで、形から唐金火鉢(からかねひばち)と思われる。手あぶり火鉢である。

※瘦石が土佐に來た時期がわかるとよいのだが。 以上



* 絵の舞台と装置 上の写真下から絵の舞台全体、又彦の膝に置いた一弦器(絵に比べ大きい)、唐金火鉢、熱燗沸、花瓶置